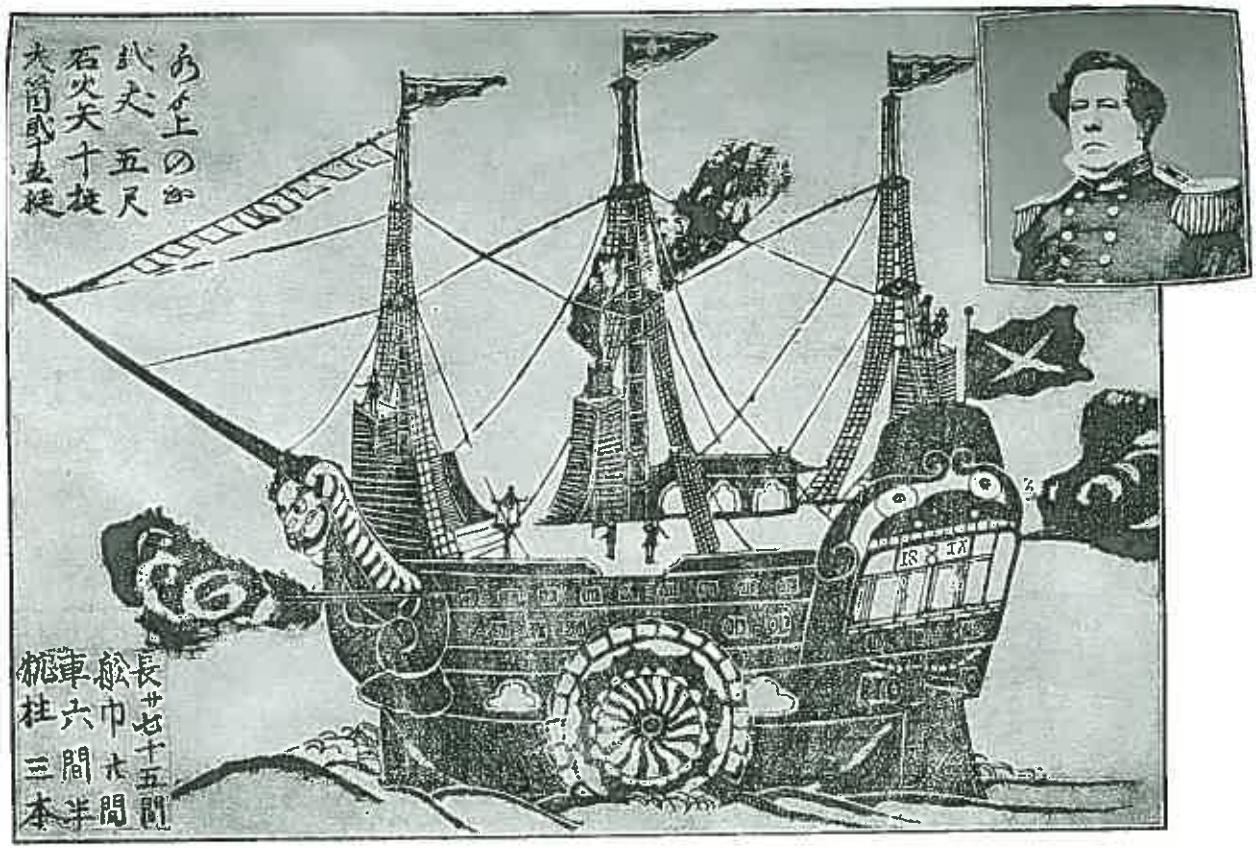
THE YONEYAMA UMEKICHI MEMORIAL HALL REPORT

米山梅吉記念館 館報

2014
（平成26年）
春
Vol. 23



「下田停泊中に於ける最も大なる出来事と問はゝ實に夜半暗に乗して其船を訪へるの客ありしことにして、則ち革命の健兒吉田松陰か私かに船に投して米國に航せんと謀れると是なり」（『提督彼理』米山梅吉著より）

ペリーは、嘉永７年(1854)、下田港に二度目の来航を果たした。その船に近づき、乗船を懇願した吉田松陰であったが、乗せてもらうことは叶わなかった。嘉永６年（1853）浦賀でペリー最初の来航を目の当たりにし、翌月長崎のロシア艦隊への密航計画も失敗。「至誠にして動かざる者は未だこれ有らざるなり」常に学んだ事を実行に活かしていくことを説いていた松陰の、決死の覚悟で臨んだ下田港での行動であった。囚われの身となった松陰は獄中で書いた。

Weeping we seem as fools; laughing as rogues. Alas! for us, silent we can only be.

（泣かんか、愚人の如く、笑わんか、悪漢の如し。ああ吾等沈黙し得るのみ）

しかし、実家の幽囚室で始めた講義は評判となり、松下村塾は地元萩だけでなく、長州藩全体へと広がっていった。彼の遺志は沈黙することなく、大きな遺産となって塾生たちに引き継がれていく。

米山がアメリカから帰国する際に持ち帰ったのが、ペリーについての原稿であった。勝海舟の題字、藤田四郎の序をいただき、『提督彼理』として出版している。

公益財団法人 米山梅吉記念館

館報第23号発行に際して

理事長　渡 邉 脩 助

全国ロータリークラブ、ロータリアンの皆様は年度終末そして新年度に向かってのご準備で、日々ご多忙のことと存じます。記念館への日頃のご支援ご協力に心からお礼を申し上げ、米山梅吉記念館よりご挨拶を申し上げます。

２月の大雪は関東甲信越地方では45年ぶりの記録的な雪でした。２月８・９日は当地区（第2620静岡山梨）の地区大会でしたが、山梨地方は交通網が遮断され孤立状態となり、陸の孤島となってしまい、約450人の会員が欠席となりました。

ＲＩ会長代理は台湾台中中央ＲＣからＭＵＳＩＣこと劉　昭恵女史でした。次年度のＲＩ会長は台湾の黄其光（ゲイリーＣＫ、ホァン）氏であり、そのおひざ元より、劉　昭恵女史を派遣されました。このことは、当地区が、また日本のロータリーが国際ロータリーの大きな流れの中に位置していることを表しているのでしょうか。

ＲＩ会長代理に随行した８名の女性ロータリアンが是非にと、米山梅吉記念館の見学を希望されて、雪の降りしきる中をご来館されました。

台湾に最初に出来た台北ＲＣは米山翁が創られた。昭和３年春までに東京、大阪、京都、神戸、名古屋、横浜の６つのクラブが設立され、そこで初めて第70地区の設立が認可されると共に、米山翁がガバナーに任命されました。

このほかに京城、大連、奉天、ハルビン、台北クラブ等が加わって日本は11クラブを数えるようになった。このことから台湾では、台湾のロータリークラブの創始者として、米山翁を崇めています。

館内では米山梅吉翁の生涯の足跡、著書、筆跡、遺品や日本ロータリーの歩み、ロータリー米山記念奨学会の模様等を熱心に見学して、より一層、米山翁に対する畏敬の念を深められたことが感じられた。台湾では見ることが出来ない雪景色を楽しみ、喜んで帰国されました。

当記念館もこの秋で創立45周年を、更に2019年（平31）９月には50周年を迎えます。実行委員会を設置して準備に入りました。日本ロータリー100周年や、東京オリンピックとも重なる年度であります。素晴しい年度にしたいと願っています。

４月26日（土）春季例祭を行います。講演会の講師は東京オリンピック誘致活動で活躍されたミズノスポーツの東京ＲＣパストガバナー水野正人氏です。東京オリンピックについての楽しいお話が拝聴出来ると思います。

創立45周年の秋季例祭は26年９月13日（土）を予定してますが、50周年事業を主体にと考えてます。講演会は「米山と三井報恩会」をテーマに、報恩会の恩恵を受けた岩手県彦部地区や青森県西平内地区の過去、現在についてのお話や、三井報恩会も招待し、報恩会の社会貢献についての講演を予定しています。

50周年事業については、これから検討することですが、完成後15年経過した新館建物の補修、特に空調設備の更改、展示室の模様替え、ロータリー50周年以降のパネルを追加、ガバナー名2000年以降の追加、展示品の更改、記念出版として米山梅吉の伝記本の出版、米山奨学生会議、記念館ＰＲを積極的にすべく、記念館と近隣周辺スポット紹介等、積年の懸案事項を献策していきます。

しかし最大の問題は財政の現状です。当記念館は全国のロータリアンからの寄付で運営されてます。新館建設も全国のロータリアンの醵金によって建設されたものだけに、入館料はいただいておらず、事業費等にまわせる経費は到底賄うことはできません。しかし、50周年事業の経費の捻出は是が非でもやらなければなりません。

従来の運営資金として第2620地区資金、神奈川２地区（2590，2780）、ロータリー米山奨学会、賛助会費、各クラブ周年事業寄付、年一人100円募金運動だけでなく、記念館役員、運営委員が積極的にクラブやメンバーに呼びかけを行い、ＰＲのために全国何処でも記念館のＰＲ卓話に出かけるよう努力をし、みんなに親しまれる記念館を目指します。

全国のロータリアンの皆様、移動例会、米山奨学生のご来館をお待ちしております。

秋季例祭

■日時　2013年9月14日（土）
■会場　㈶米山梅吉記念館ホール

- ●例祭及び墓参
- ●例祭式典
- ●記念講演
  演題　「世界遺産としての富士山
  ～郷土の歴史と文化を中心に～」
  講　師　井上輝夫 氏
  （裾野市立鈴木図書館長）
- ●アトラクション
  尺八と民謡の調べ
- ●懇 親 会

記念講演

世界遺産としての富士山

―郷土の歴史と文化を中心に―

井 上 輝 夫（裾野市立鈴木図書館長）

神聖で荘厳な姿の富士山は、山域から山頂へ登拝及び山麓の霊地への巡礼を通じて、富士山を居所とする神仏の霊力を獲得し、自らの擬死再生を求めるという独特の性質を持つ富士山信仰を育み、また、海外の芸術家にも影響を与えた浮世絵など、多くの芸術作品に取り上げられてきました。この信仰の対象、芸術の源泉である富士山は、世界でも高く評価され、第37回世界遺産委員会において世界遺産（文化遺産）に登録されました。

富士山の高さは3775.63㍍、火口長径850㍍、短径650㍍、火口の深さは220㍍で、四つの火山が重なり合ってできている複合火山です。富士山中腹からの噴火活動を「側火山」と呼びますが、名前がつけられている火山だけでも70個以上あります。富士山最後の噴火は、宝永４年（1707）の噴火です。

ご承知のように、富士山は多くの芸術作品のなかで取り上げられてきました。文学では、山部赤人：

田子の浦ゆうち出てみれば真白にそ富士の高嶺に雪は降りける（万葉集）、飯尾宗祇：なべて世の風をおさめよ神の春、松尾芭蕉：ひと尾根はしぐるる雲か不二の雪眼にかかる時や殊更さつき富士、小林一茶：かたつぶりそろそろ登れ不二の山、若山牧水：富士が嶺やすそのに来たり仰ぐときいよよ親しき山にぞありける、また絵画でも葛飾北斎や歌川広重の浮世絵に描かれています。三保の松原は謡曲「羽衣」の舞台にもなっています。

駿河三保之松原（歌川広重）

富士山と浅間信仰

富士山信仰の中心は、山麓に古くからある浅間神社の存在です。度重なる噴火によって、周辺の人々はその恐怖におののいていました。そして噴火を鎮めたいという強い願いのもとに、富士山をご神体として仰ぎ、山麓に浅間神社を祀り、岳神の霊を慰めて奉りました。

全国にある富士浅間神社は1316社とされ、この他山の上、峠、村はずれの小さな祠まで加えると倍以上になるといわれています。その大部分は東関東に集中しており、一番多いのは千葉県の257社です。全国に分布した理由は、噴煙をあげ溶岩を流し続ける富士山の怒りが鎮まることを願ったものとされます。東関東に集中しているのは、噴火による火山灰が偏西風によって運ばれ、その降灰による多大な被害をもたらしたからと考えられています。

浅間神社をはじめて祀った記録は、山梨県河口湖町にある河口浅間神社境内に「美麗石（ヒイラ石）と呼ばれる古代祭祀の石閣が『三代実録』に紹介されたものといわれ、石をもって造営された祭祀は彩り美麗であったといわれています。

浅間神社によっては、農業の神として崇拝し、五穀豊穣を祈ったり、機業の神として養蚕の守護神として祀られている浅間神社もあります。

富士山本宮浅間大社（富士宮）の祭神は、コノハナサクヤ姫です。古事記によれば、木の花の笑み栄

河口浅間神社「美麗石」

えるという意味で、オオヤマツミ神の娘で、イワナガ姫という姉がいるとされています。コノハナサクヤ姫は、アマテラスオオミ神の孫アマツヒコホノニニギノ尊と結婚し、戸のない部屋に入れられ、火を放たれましたが、三人の子どもを無事出産し、いずれも火（ホ）の字が入った名前がつけられます。その一人がヒコホホデミノ尊（山幸彦）です。「記紀」でみられる姫は、活火山として噴煙をあげ、溶岩が流れ出す富士山の祭神として祀るにふさわしい女神のように思われます。

山梨県忍野村忍草浅間神社には、３体の木造神像が祀られています。「木花咲耶姫」「鷹飼」「犬飼」と伝えられ、正和4年（1315）丹後の仏師静存（しょうぞん）の銘記があります。その表情は、中世の能面や神像共通する部分もあり、浅間神社の神像としては最古の例です。

浅間神社

次に、浅間神社についてみてみます。

① 富士山本宮浅間大社（富士宮浅間大社）

浅間神社で唯一浅間大社と呼ばれます。江戸時代、徳川家康の命により浅間神社の中心として活動するように、大社の名をいただいたと伝えられています。現在の場所「里宮」に社が建立されたのは江戸時代で、以前は「山宮」にあったとされています。「里宮」には湧水池があります。湧水によって噴火を止めるという、自然に対しての能動的な思想の意味があります。また、浅間大社は、富士講の人々の登山口になり、湧水池は神聖な場所へ入るための、清めの池となっています。

② 山宮浅間神社

山宮の浅間神社には本殿がなく、富士山そのものを神殿として直接的に信仰対象としていました。これに対し、里宮は、本殿があり、富士の御神雲を本殿に迎えて祭儀を行う、という間接的で人間の身近で神を敬うという思想変化に現れていると

思われます。山宮は、本社の元の宮であり、そのご神体は大山酸祇命といわれ、その創祀において、本宮よりも古いといわれています。

③ 須山浅間神社

須山浅間神社は、富士登山道の南口と称しました。以前は、富士宮浅間宮、南口下ノ宮、下之浅間と呼ばれていましたが、現在は浅間神社と呼び、明治８年に郷社となっています。須山浅間神社は、社殿におさめられた棟札から、遅くとも16世紀には存在し、現在の本殿は、1823年に改修されています。また、1966年に拝殿を、2012年には拝殿、弊殿を新築し、履殿を修復しています。

須山浅間神社

④ 富士登山道にかかわる浅間神社

富士登山道にかかわる浅間神社としては、先にあげた神社の他に、村山浅間神社、御殿場浅間神社、須走浅間神社、北口本宮浅間神社（上吉田浅間神社）、河口湖浅間神社などがあります。

富士山への旅

古代から中世における富士山麓の道は、官道と、官道から分岐する生活道に区分できます。駿河を走る官道は東海道、甲斐の官道は甲斐路または御坂路でした。東海道は、沼津市近辺から御殿場市を経て、箱根外輪山の足柄峠を越え、相模国へ抜けていました。駿河の国では、御殿場市から裾野市須山、十里木を経て富士市へぬける十里木道、箱根権現へ通じる道、裾野市から三島市への三島往還も延びています。これらの道は、有史以前からの古道であったことは間違いありません。古道は、火山灰地で作物のとれない富士山麓に経済的な潤いも与えました。

室町時代になると富士浅間信仰が活発化し、多くの登拝者を迎えます。この登拝者から道銭をとり、祈祷や宿泊をさせて収入を得る「御師」が生れました。この繁盛に目を付けた支配者たちは、登山道に通ずる道に「導者関」という関銭徴収のための関所を設けました。この道銭は、江戸時代まで続いていきます。

江戸時代、東海道の中で賑わった宿場の一つが三島宿です。古来の旅は、主に官人の赴任の公的な旅、庶民には、防人や税を納める役務の旅、信仰の修行としての旅があげられます。三島宿は、富士山への玄関口ともいえるでしょう。

富士山須山口登山道の成立

鎌倉時代には、富士山「須山口」の記録が見え、室町時代には須山口登山道が開かれたと考えられています。江戸時代には、富士講を中心に、山開きの期間に平均1500人近くの登山者を迎えました。現在の須山口一合目「須山御胎内」は、須山口登山道が拓かれた頃から、一合目として設けられていたと考えられ、遅くとも江戸時代宝永噴火以前には存在していたことが、登山道絵図から知ることができます。

富士登山は、中世には富士山を霊山とした信仰の山として、修験僧による修行の場と考え、近世には富士講の発展もあり、一般庶民からも信仰の山として、多くの登山者を迎えることになります。江戸時代には、富士山への道として、川口口（北口）・吉田口（北口）・須走口（東口）・須山口（南口）・村山口（南口）・大宮口（南口）の６つの登山道が成立していました。

登山道絵図

明治時代になると、アーネスト・サトウも登っています。箱根から三島へ出て、佐野で昼食をとり須山に泊まり、須山口から富士登山を行ったという記録が、彼の著書『日本旅行日記２』に記されています。

各登山道には、道者が富士登山の起点とする浅間神社が祀られ、登山の安全を願うと共に、家族や親戚、近隣の住民の生活がそれぞれ安心して暮らせるよう、富士山頂を目指したのです。

世界遺産登録により、富士山の持つ素晴しい価値を保護し、確実に後世へ継承していくための方法や活用について定めた「保存管理計画」が作成されます。この計画によって、私達は、富士山をさらに世界遺産としてふさわしい状態で、未来に引き継いでいくことになるでしょう。

80年前の絆再び

三井報恩会と特定振興村彦部村を考える会
会長 長澤聖浩

私の暮らす岩手県紫波町彦部地区は、今から約80年前の昭和10年（1935）に三井報恩会の「特定振興村」に指定された地域であります。

三井報恩会とは、三井財閥が設立した社会事業財団の事で、その初代の理事長が米山梅吉氏でありました。

当時、度重なる冷害等に苦しんでいた私達の地域は、三井報恩会の助成を受けて、乳牛や緬羊の飼育を奨励し、稲作と合わせた複合経営の指導を受け、破綻に瀕していた地域の農家が救われたのです。

また、台所改善や農繁託児所の開設など生活改善に関わる指導も受け、岩手県の農村振興の模範となったのでした。

私達の地域が指定された経緯やその事業内容につきましては、以前米山記念館の館報にて紹介させていただきましたので、詳しくはそちらをご参照いただきたいと思います。

昭和15年（1940）に指定解除後は、太平洋戦争の開戦、そして敗戦後の財閥解体等により長い間、三井報恩会と米山梅吉氏との繋がりは途絶えておりました。

それから数十年の時を経た平成23年（2011）に私が地域の歴史を研究する中で、三井報恩会と米山梅吉記念館に資料調査に訪れたのがきっかけとなり、再び交流が生まれたのでした。

平成24年(2012)には「三井報恩会と岩手県彦部村」という当時の事業内容をまとめた本を出版し、関係機関に納めました。

彦部地区と平内町の人々が一堂に会して

そして今年、平成25年6月には三井報恩会の事業に感謝し、その功績を顕彰するために彦部地区の代表者10名によって「三井報恩会と特定振興村彦部村を考える会」が発足しました。

この会では、70年前に彦部地区で展開された三井報恩会の事業について歴史的事実を調査、顕彰するとともに、現在も存続している東京の三井報恩会、当時の理事長米山梅吉氏の記念館、そして当時同時に指定を受けた青森県西平内村（現在の平内町）との歴史的交流ができないものか模索しました。

彦部地区に残る当時の資料

そこで、まずは青森の平内町役場を訪ね、この趣旨を総務課の職員の方にお話ししたところ、快くご賛同いただくことができました。また、三井報恩会と米山梅吉記念館の方々もぜひ当時の事業の痕跡を辿りに訪れたい旨のお話をいただきまして、いよいよ交流事業を行う運びとなりました。

ついてはどの様な内容にするべきか、考える会のメンバーで話し合ったところ、初日は彦部地区内に残る当時の事業関連施設等を見学いただき、２日目はバスにて平内町へ向かい、交流を行う。期日は稲刈りの合間の９月25～26日と決まりました。

さて、研修会当日は東京の三井報恩会からは、専務理事の山本懋一氏、事務局の辻善章氏、三友新聞社（三井グループの広報誌）の吉澤大輔氏が参加されました。静岡の米山梅吉記念館からは事務局長の木内昭夫氏、学芸員の市川真理氏が参加されました。また、『点描米山梅吉』の著者で米山梅吉を顕彰する活動を行っておられる元三井信託銀行副社長谷内宏文氏も参加され、総勢６名のお客様がお見えになりました。

米山梅吉の御子息の奥様米山むつき氏も出席の意向でしたが、残念ながら御都合により欠席され、かわりに我々のために高級なアンパンを人数分お送りいただいたのでした。

９月25日、岩手県紫波町の紫波中央駅で６名をお迎えし、彦部地区の代表者とともに紫波町役場の藤原孝町長を表敬訪問し、歓迎のお言葉をいただきました。

その後、彦部地区へ移動し、三井の専任指導員であった小野文眞氏宅（現小野佳璋氏宅）にて乳牛の飼育施設の跡を見学し、また、彦部緬羊組合長佐藤長四郎氏宅（現佐藤信夫氏宅）にて緬羊の飼育施設の跡及びホームスパンの加工場の跡を見学しました。

また、我が家に保存してある「藁打機械」「製縄機」「製莚機」など三井の助成金で購入した藁製品加工機械の実演を行いました。

当時の機械を実演する筆者

当時の佐藤定八村長宅では、三井報恩会より村長へ届いた手紙などの貴重な資料をご覧いただき、また、大迫街道沿いに建てられてあった標柱の跡地も見学しました。

今から77年前の昭和11年６月７日に米山梅吉氏が来村された際に、彦部村役場前で撮影された記念写真が残されていますが、その故事に倣って、77年前と同じ場所で今回の参加者で記念写真を撮影し視察は終了しました。

どの方々も約80年前の資料や機械が残されていることに感心し、三井報恩会の事業が東北地方の農村の更生に確実な成果を残した事を実感されたようでした。

夜には宿泊場所の「ラ・フランス温泉館」にて懇親会が開催されました。地元に伝わる「大巻御祝い」（お祝いの唄）や「星山神楽」などの伝統芸能が披露され、またお互いの自己紹介等も行われ、楽しく有意義な時間を過ごす事ができました。

星山神楽の舞

翌26日は、お客様６名と彦部地区民31名合わせて37名の訪問団で、バスで青森県平内町へ移動しました。

このバス研修に参加された彦部地区民の殆どは当時の関係者ではなく一般公募者でありました。彦部地区は歴史や文化に対する認識の深い住民が多く、バスツアーへの参加希望者が多く集まったものと思います。

バスの車中では、三井報恩会、米山記念館、谷内先生らから報恩会と米山梅吉氏についてのお話を伺い、改めて当時の事業について勉強する事ができました。

平内町は養殖ホタテ日本一のホタテの産地との事で、最初に「ホタテ広場」というホタテの直売施設を見学しました。

その後米山梅吉氏揮毫による三井報恩会の顕彰碑がある「山口コミュニティーセンター」にて交流会が開かれ、船橋茂久町長をはじめとする平内町関係者と彦部地区民、及び三井報恩会、米山梅吉記念館の関係者が一堂に会して活発な意見交換が行われました。

最後に顕彰碑の前にて参加者全員で記念撮影を行い、平内町を後にし全日程が終了したのでした。

今回の企画を通して、改めて三井報恩会の事業が我々の地域社会に及ぼした影響が非常に大きかった事を再認識しました。そして70年以上の時を経て、再び当時の関係者の方々が親しく交流できた事は大変に有意義な事で、米山梅吉氏ら今は亡き当時の関係者の方々もきっと喜ばれているに違いないと思いました。

彦部地区では当時建てられてあった標柱が、木製であった為に腐食して失われてしまいました。そこで現在、地域内や当時の関係者の方々より浄財を募り、標柱を復元するかたちでの記念碑の建立計画が進行中です。

これからも、彦部地区では過去の歴史的事実を掘り起こし、それを現在に生かす活動を行いたいと考えており、三井報恩会、米山梅吉記念館、振興村との間の交流が末永く続いて行く事を願っています。

「斎藤實とロータリー展」開催にあたり

奥州市立斎藤實記念館

毎年２月26日は、斎藤實が昭和11年の２.26事件で凶弾に倒れた日であると同時に、岩手県奥州市立斎藤實記念館の冬の企画展開催期間に当たります。今回当館では、平成26年２月25日から３月30日まで、斎藤實とロータリーの関連資料を中心とした企画展「斎藤實とロータリー展」を開催します。そのきっかけとなったのは、昨年６月、ロータリーの短期交換留学生による、1930（昭和５）年のシカゴと1931（昭和６）年のウィーンのロータリー国際大会公式議事録と、1928（昭和３）～1932（昭和７）年頃の冊子The ROTARIANの再発見でした。1930年の国際ロータリー創立25周年目にあたる1930年の議事録には、出席した徳川家達のスピーチの内容が、1931年の議事録には、米山梅吉が寄せた挨拶文が掲載されています。また、The ROTARIANには京城ロータリークラブのチャーターナイトの様子や、「今月の誉れ」というコーナーに斎藤實がとりあげられていたり、米山梅吉氏が台北ロータリークラブを訪問している写真等が掲載される等、どちらも当時のロータリークラブの活動状況を示す大変興味深い資料です。

日本のロータリークラブ創設に関わった米山梅吉と、第30代総理大臣退任直後の斎藤實が、共に1935（昭和10）年のポール・ハリス来日の際の記念撮影に臨んでいたことが、現在、当館と米山梅吉記念館との縁に繋がっております。それに加え、米山梅吉は、斎藤實総理大臣時代に三井報恩会の一員として農村更正事業の推進に深く関わり、岩手県内の農村視察に訪れるなど、岩手とはロータリー以外での結びつきもあります。

京城ＲＣの午餐会（昭和10年10月４日）

斎藤實は、東京及び京城ロータリークラブが設立された際に名誉会員となっていました。その斎藤實とロータリーの関係を裏付ける重要な資料が、日々の事柄や面会者等を書き留めた「斎藤實日記」です。総理大臣在任中の1933（昭和８）年４月29日の日記には、ロータリーの第70地区年次大会にあたり首相官邸にロータリアンを招待して茶会を催した旨が、『(一中略一) 二時三十分ヨリ官邸ニ全国ロータリアンニ会見　茶ヲ供ス(来会者六百六十名)』と記載されています。斎藤實が、名誉会員としてその活動に敬意を表しもてなした様子がわかります。また、総理大臣退任後の1935(昭和10)年２月９日の日記には『(一中略一) 午后五時半ヨリ東京会館ニ於ケルRotary Club family night に出席ス(米国ロータリー元祖Paul Harris 夫婦 及 BobHill 夫婦已下多数ノRotarianヲ招待セルナリ)』と、来日したポール・ハリスとの面会の記録があります。米山氏との写真は、この時に撮影されたものです。同年10月４日の日記には、京城の電気会社社宅でのRC午餐会に夫人同伴で出席したという記載があり、出席したロータリアンとの記念写真には、ロータリーマーク入りの前かけをした女性たちも写っています。この時は締めていませんが、春子夫人が例会出席用に特別に誂えたロータリーマーク入りの帯があり、今回の展示資料の一つとしてご覧いただけます。その京城RCの1927（昭和４）年６月の会員名簿も残されており、当時の会長志賀潔(赤痢菌発見者)をはじめ、設立に関わった松岡正男と住井辰男の名前も見え、1925(昭和２)年設立のクラブの歩みを物語る貴重な資料です。

現在残されているこれらの資料は、ロータリーの歴史の一端を垣間見ると同時に、アメリカ留学やヨーロッパ視察随行等により培われた国際感覚を持つ斎藤實が、海外及び日本のロータリークラブとその活動に対していかに関心を寄せ、良き理解者であったかを伺い知ることができるものです。

これら、春子夫人のロータリーマーク入りの帯や、「斎藤實日記」と関連写真、会員名簿、再発見された国際大会公式議事録やThe ROTARIAN等を中心に、国際ロータリー及び日本のロータリーの歩みと米山梅吉の紹介なども加え、様々な視点から斎藤實とロータリークラブとの関わりを紹介致します。現在のロータリークラブに繋がる歴史的資料として皆様に御覧いただければ幸いです。

最後に、このたびの企画展開催にあたり、東京ロータリークラブ会長壬生基博様より、メッセージや昭和10年２月９日のポール・ハリス来日時の映像資料を頂戴いたしましたことを、心より感謝申し上げます。開催期間中、展示内で御紹介を予定しており、皆様のご来館を心よりお待ちしております。

期　間　平成 26 年２月 25 日～３月 30 日
場　所　斎藤實記念館２Ｆ北展示場
連絡先　斎藤實記念館 電話 0197－23－2768

三友新聞を拝見して

ギリ・ラム（東京米山友愛ＲＣ・三井物産戦略研究所）

私が勤務する三井物産では、会社の情報共有のため、三井グループの情報紙である三友新聞を購読しています。いつものように新聞に目を通していたところ、60周年記念号の記事が目にとまりました。ここには三井報恩会の役員が、静岡の米山記念館を訪問したことが掲載されていました。私自身が元米山奨学生でもあり、東京米山友愛ＲＣのメンバーとして記念館を訪れたこともあり、興味深くこの記事を拝見しました。

梅吉翁は三井銀行の経営者として活躍し、個人の財産を提供して社会のために奉仕しました。また、日本にロータリークラブを創り、その活動が現在も脈々と続いています。自分もメンバーの一人として、ロータリー活動に携われることを誇りに思います。

私は、ネパールのポカラ近郊マルディコラで生まれました。国立トリブバン大学を卒業し、ネパールのＯＤＡで一年間働いた後、来日。1996年に室蘭工業大学に入学しました。この時に、米山梅吉の社会貢献について読む機会があり、自分の財産を投げうって行った梅吉翁の活動に感銘しました。これがきっかけとなり、人と人との交流があり、それぞれの地域で事業を興しているロータリアンと一緒に活動も行えるということで、数ある奨学金の中から、米山奨学金を選びました。実際、月1回の例会参加や、地域での奉仕活動をロータリアンと共に行い、夢を実現していけるという面でも、米山奨学金と関われたことは大きな収穫でした。

社会活動

室蘭工大で学びながら、1997年にはマルディコラ・ネパール教育基金を設立し、ネパールの教育環境改善活動を行ってきました。この基金では、団体や個人からの寄付を集めて、これまでに、1000人以上の学生に奨学金を提供し、12件の図書室設立やパソコンセンターの建設など、教育施設の整備に取り組んできました。さらに、教育格差改善のために教育制度改革に力をいれてきました。

お陰様でこの奨学金は16年以上続いており、今ではこの奨学金によって学んだ人が、教員や技術者となって、次世代の教育者としての活躍をはじめています。私は、人を育てることは、国を作る柱であると考えています。このように奨学金を受けた人達によって、その精神が受け継がれていくことは、本当に嬉しいことです。また、遅ればせながらネパール政府もこういった活動に刺激を受け、積極的な改革を行ってきました。

ロータリアンとしての活動

2010年2月、東京米山友愛ＲＣが誕生しました。私はこの創立メンバーでもあります。創立メンバー23名は、米山学友や財団ＯＢが半数以上です。国籍は9ヶ国、平均年齢も38歳と若いクラブです。自分達が米山奨学金を通してロータリーの精神を学び、この活動を広げていくと共に、他のクラブを学友の故郷や様々な国と国を繋げるパイプ役としての活動も重要です。クラブ名を友愛としたのも、各国の特徴を生かし、自分達の受けた恩をお返ししながら、世界の平和に役立つような活動をしたい、という願いがこめられています。メンバーは現役のサラリーマンが多いため、例会は土曜日や平日の夜に行われています。現在、チャーター時より10人以上メンバーも増え、入会希望者も後を絶ちません。女性メンバーが多いのも特徴です。

2014-15年度、私は米山友愛クラブの会長を務める予定です。私達のクラブ運営が、日本のロータリー活動において若返りのきっかけとなり、ますます活気づいてくれれば、と願っています。

私が初来日した約20年前と今の日本は、少し変わってきたように思います。丁寧で謙虚に働く日本人に勇気づけられたことは、今も深く印象に残っています。一方で、ものが溢れ、便利な生活に浸る姿が本当の幸せなのか？

ロータリアンとしてシンポジウムに参加

日本での活動

ネパールの教育改善支援活動を通じて、ネパールと日本の架け橋（日本の文化である茶道やおもてなしをネパールで広める活動、ネパールの文化を日本で紹介する活動）を行ってきました。私は2011年に東日本大震災が発生後、震災の翌日から、在日ネパール人らへの情報提供、被災地への義捐金集め、炊き出しなどの物資や、ヨガの実践によるメンタル面のケアなどの支援に携わりました。震災発生は大変なことでありましたが、同時に、日本人の優しさ、謙虚さ、忍耐強さなどを改めて感じました。微力ながら、2012年からもロータリアンとして、毎年被災地へ行って、僅かではありますが復興支援活動を行っております。

昨年の東北支援の様子

今後

母国ネパールの教育環境は以前に比べかなり向上してきました。しかし、産業やインフラはまだ不十分です。せっかく学んだ人達が、働く場を求めて海外に流出してしまうのが現状で、英語をベースとする学校に人気が偏ります。今後は、道徳を中心にネパール語で教え、その他すべての教育を小学校から英語で教えることを進め、国際的に優れた人材を育成し、ネパール国内だけでなく海外でも競争できる人材育成に努めたいです。

私が室蘭工大を卒業後、総合商社の研究所に入社するきっかけとなったのは、三井物産戦略研究所会長の寺島実郎先生の講演を聴いたことでした。ここで、「自分が学んだ技術を生かして、国作りに関与したい」という思いが強くなりました。今、三井物産戦略研究所で特許調査、技術評価、再生可能エネルギー事業関連の事業創出などの仕事に従事しています。ここでの仕事も、社会のため国のためのものであり、尊敬する米山梅吉氏も三井グループにいたことは、今同じ三井グループで自分が働いていることの、大きな励みになっています。

母国ネパールでは、単に開発を進めるだけではなく、昔の良さである助け合いを生かしながら、必要に応じて共に活動していくこと。これが、私が開発に携わる上で心がけていることです。共に活動し、共に夢を実現できる喜びは何物にも代え難い大きな財産です。

今後は、ネパールの豊かな水資源を有効に活用し、水力発電の開発によってネパールの発展に寄与していきたいと思います。具体的には、ネパール全土の電力供給余分の電力をインドに売電する、安い電気料金によって外資系企業の誘致を進める、などです。これからも、三井グループの一員として、ロータリアンとして積極的に活動を続けていきたいと思います。

米山梅吉記念館の理事に就任して

積　　惟　貞（沼津ＲＣ）

米山記念館の地元沼津クラブ出身のパストガバナーとして理事をお引き受けすることになりました。以前から米山記念館には何かと御世話になることが多かった割には米山梅吉翁に関してそれ程の知識もなく、改めてその人となりを勉強することになりました。幸いに常務理事の井口賢明さんらの博識に助けられ、少しずつ米山梅吉像が出来上がるようになりました。幼少から早熟で才知に溢れ、だからこそ地元の庄屋米山家の目に止まり、養子として迎えられたわけですが、決して単なる優等生ではなく、養家に内緒で出奔し東京に出る決断、米国留学の達成など、天性図抜けた実行力の持ち主でもありました。ですからあらゆる点で完璧、非の打ち所のない近寄りがたい人物のように思われがちですが、決してそんなことは無く、一度接した人を虜にするような大きな魅力も持ち合わせていたと言います。だからこそ良き師に恵まれ、多くの友にも愛されたのでしょう。米山翁の功績は、日本ロータリーの創設者としては勿論、明治・大正・昭和と近代日本にとっての揺籃期を国の中心となって支えた偉大な人物としても顕彰すべきでありましょう。

当米山梅吉記念館は、米山梅吉翁が晩年過ごした米山別邸保存運動から始まりました。初めは、1975-76年度当地区のガバナーを務めた鱸正太郎ＰＤＧと地元ロータリアンが中心となり、別邸を記念館とする方針でしたが、諸事情で此を断念し、米山家のご理解も得て、米山本邸に記念館が設立されました。この際の当地区諸先輩や東京クラブを始め多くの方々のご苦労とご協力が、今の米山梅吉記念館に息づいているのだと思います。伝えられるところでは、鱸ＰＤＧはウォーリングフォードにあるポール・ハリスの記念館を訪れたことが有ったと言います。米山梅吉記念館創立には、そんな記憶も下地となっていたでしょう。私自身は、ポール・ハリス記念館を訪れたことがありませんので、いつかは訪問してみたいと思っています。

いずれにせよ、これを機会にもう少し米山梅吉と言う人物を勉強し、何処から見ても非の打ち所のない完璧な米山梅吉にも、こんなくだらないエピソードがあったのだ、と言う何かも知りたいと密かに思っています。

さて、米山翁に関する個人的な興味はともかく、理事として喫緊の課題は、記念館の運営を如何に円滑に行うかであり、此までも諸先輩のご苦労は一方ならぬものがありました。勿論、記念館の運営資金の全ては日本のロータリアンの浄財で賄われておりますが、最近ロータリアンそのものの減少の影響もあってか、特に賛助会費や100円募金がなかなか集まりにくい状況であります。加えて建物の老朽化への備えも必要となっています。新理事としては如何に全国のロータリアンの皆様にご理解いただき、ご援助いただくか、今までにも増した努力と、新たな発進力を展開させなければならないと肝に銘じているところで有ります。何卒よろしくお願い申し上げます。

米山梅吉と旧沼津中学校

浜　　悠　人（沼津地区保護司ＯＢ会長）

標題の旧沼津中学校を述べるには、まずは沼津兵学校から論を起こさねばなるまい。沼津兵学校は明治元年(1868)、これまで三百年引継がれた江戸幕府が瓦解し大政奉還した旧徳川将軍家が静岡藩一藩に封ぜられたことから始まる。そして、これまで幕府に仕えた旗本や御家人が大挙して江戸から沼津や静岡に移住した。静岡新藩は藩学の制を定め、明治元年に静岡に静岡学問所、沼津に沼津兵学校設置の布令を出した。沼津では水野藩が転出した後の沼津城の城内の建物を兵学校に充てた。明治元年十月二十四日、西周が沼津兵学校

頭取に命ぜられ、同年十一月には赤松大三郎、塚本桓甫、伴鉄太郎、大築保太郎らが一等教授方に命ぜられ、以下、一等教授並として渡辺一郎、二等に浅井鳳六、乙骨太郎乙、三等に平岡芋作、萬年精一、間宮鉄太郎と優れた教授陣が配置された。その上、幕府が江戸から持ち込んだ多数の和漢洋の書籍や器械があった。沼津兵学校と云う名称だが、兵学校と云うより、内容は総合大学の観を呈していた。国内諸藩から推挙、選抜された優秀な若者達が城内の石造二階建ての堂々たる校舎で熱心に学んだ。ところが明治政府は明治三年、沼津兵学校を兵部省の管轄とし、同五年、政府の陸軍兵学寮との統合のため、東京へ移転させ、沼津より引払わした。五月十一日、沼津兵学校資業生六十三名は東京兵学寮に合併のため沼津を去り、沼津兵学校は名実ともに消滅した。実質三年六ヶ月の存続であったが、沼津兵学校は日本の近代教育の発祥地と考えられる。この事につき後年、米山梅吉は徳川幕府の大政奉還に引き継ぎ、徳川文化の奉還、第二の奉還と呼んでいる。

静岡県最初の沼津中学校
（『目でみる沼津市の歴史』より）

沼津兵学校が東京へ去った後は、同時代頃設立された沼津兵学校附属小学校が引き継いだ。同校は、明治二年一月に開校し、沼津兵学校の予備教育機関であり、今日の小学校とは違う面を持ち、洋算、地理、体操など近代的教科と一斉授業方式を採用した我が国小学校の先駆的役割をなすものであった。

沼津兵学校附属小学校の頭取は、兵学校三等教授方の蓮池新十郎が兼任した。沼津兵学校の兵部省移管に伴い、附属小学校は明治四年十一月には「沼津小学校」と改称され、静岡学問所の管轄下に置かれた。明治五年八月の学制施行後は、完全に徳川家の手を離れ、江原素六らの努力により明治六年（1873）一月には公立小学校集成舎として生まれ変わった。

集成舎の正則（小学科コース）は一般の小学校として続いていったが、変則（中学科コース）の方は明治九年（1876）八月、沼津中学校（標題の旧沼津中学校）として独立した。校長江原素六以下、名和謙次、岡田正、末吉択郎、倉林五郎といった兵学校以来の優れた漢学、英学、数学教師を擁し、さらに外人教師ミーチャムを迎え、極めて高いレベルの教育を行った。校舎は、沼津兵学校を譲り受けたのか、広壮な洋風二階建ての石造建築で、寄宿舎の設備もあり、北隣りには外人教師の洋風住宅もあった。残念なことに、明治十年三月寄宿舎炊事場より発火、校舎は延焼。書籍、器械ことごとく焼失した。幸いにも外人教師の住宅が焼失を免れたので、これを修復、増築して教場に充てた。

ところで、米山梅吉は地元の映雪舎で尋常高等小学校を修了し、明治十四年、十四歳の時、この沼津中学校に入学した。そして、明治十六年十二月まで二年数ヶ月の間、上土狩の実家から沼津中学校まで、毎日、徒歩で通学した。往復四里、三時間余を費やした。往き帰り徒歩で、思索の時間にあてられたと云う。当時の沼津中学校は、先に述べたように、沼津兵学校の跡地で、今の大手町城岡神社の南のあたりに位置していた。駿東郡唯一の最高学府で、生徒数は多くなかったから、師弟の接触は緊密で、個人教授に近かった。学級があっても漢学、英学、数学と学科学科でよく出来る者は随所進級を許された。沼津中学校在学中が梅吉にとってもっとも楽しい時代だった。だが、中学二年、三年と送るうち、彼は前途を考え、煩悶し始めた。そして、地方で一生埋もれることなく、上京し苦学してでも自分の希望する道を切り開きたく思った。胸中悩みを親友の稲村君に打ち明けた。そして梅吉は、明治十六年の十二月、無断で家を出、箱根山を越し、東京に向かった。このことにより彼は、沼津中学校とお別れをし、一生の大きな転機となったのである。その後、沼津中学校は明治九年、開校から実質十年を経た明治十九年（1886）静岡中学校へ合併吸収され、ここに沼津兵学校の直接的な遺産は、沼津から消え去った事になる。

沼津中学校時代の梅吉

沼津兵学校の碑

米山梅吉の下田講演

井口賢明（沼津北RC）

【はじめに】

もう10年も前になるが、米山梅吉記念館の創立35周年記念誌『超我の人　米山梅吉の跫音』の編集に携ったことがあった。これに米山梅吉の年表を付した。その際、米山について、いわば基本書ともいうべき昭和35年５月発行の青山学院初等部編集の『米山梅吉傳』の年譜をもとにした。当然のことながら、それなりの検証をしたうえでのことであるが、時間的、能力的に不足なことから検証できないまま、転記したものがいくつかあった。その一つに、大正13年４月の「徳川家達公と共に伊豆下田に赴き、静岡県育英会の為に吉田松陰に関し講演」という部分があった。今見て、「静岡育英会」を「静岡県育英会」としたことまで同じであることは汗顔の至りであるが、とにかく充分に検証できていないところは、当初から気になっていた。このため、年表だけでなく、内容の面についても、その後調べたりしたことを何回かにわたり、館報に掲載した。しかし、この下田講演のことについては、気にかけながら、解明できないまま10年が経過してしまった。

昨年、次のような新聞記事のあることを知った。これは、下田市の図書館に頼んでのもので、『静岡民友新聞』大正13年４月８日のものである。これには、「伊豆巡視の徳川公　下田歓迎會」なる見出で、「静岡育英會總裁徳川家達公は、同會々長平山男、緒明同會理事、本縣辛島内務部長外數氏と共に、去る六日……自動車にて雨中天城の嶮を突破し午後四時下田着、數発の花火を打揚げ多數有志歓迎の裡を平野屋旅館に入り休憩の後、同日午後一時から港座が開催の同會第四回講演會場に至り、開會の辭（育英會理事河井貴族院書記官長）、自然と人體（醫學士飯田同理事）、當年の吉田松陰（米山同理事）、所感（平山同會長）の講演の後、徳川同總裁の挨拶あり……衆聽定刻前に満場立錐の餘地なく無慮三千人、盛會裡に同五時閉會」とある。

伊豆巡視の徳川公
下田町歓迎會

すなわち、米山は、静岡育英会の理事として、その事業の一つである講演活動のため、静岡育英会総裁の徳川家達らとともに、大正13年４月６日、伊豆の下田町に赴き、「當年の吉田松陰」という演題で講演を行ったというわけである。ようやくその一端を知ることができたわけであるが、これに敷衍して、思いつくままに記してみる。

なお、この記事には、静岡育英会を静岡育美会、河井（書記官長）を河合、米山を半山（はんざん）、松陰を松蔭としたり、日時の付合しないところや予定と実際との間の表現に不自然な点があったりなど、混乱が見られる。日時の付合しない点は、後に触れることとする。

【静岡育英会】

静岡育英会のことは、館報前々号に若干記されている。重複をいとわず触れてみる。静岡育英会というのは、大政奉還により、徳川幕府の幕臣が大挙して、静岡や沼津など駿河あるいは遠江の地に移り住んだ。その際、15代将軍慶喜が蟄居し、徳川宗家を継いだ４才の家達も静岡の地に移り住んだ。

しかし、それも束の間、廃藩置県により静岡藩はなくなり、藩主家達も東京に戻っていった。幕臣たちは、駿河の地に移住したものの、静岡藩はなくなり、家達が行ってしまえば、働き口がなくなってしまう。有為な人は、新政府から召抱えられたり、自ら仕官口や仕事を探すべく、東京に出て行った。

一方では、新政府に仕えることを潔しとしない心情のある者、その他諸々の理由で駿河の地にとどまった者もあった。とはいえ、移住間もなくで縁故の少ない身であれば、残った幕臣達も多くが糊口を凌ぐのが大変で、充分な暮しができるわけではなかった。したがって、子弟に充分な教育を与える余裕もなかった。

時勢も推移し、東京に戻っていった有力な旧幕臣を中心に、駿河の地に残された旧幕臣の子弟の教育を支援することの必要がいわれるようになった。そのままでは、徳川幕臣の一体感を危うくするおそれもあった。このようなことで、明治18年７月設立されたのが静岡育英会である。運営は、静岡育英会とはいうものの、事務所は東京であり、主に東京で行われていた。

その事業の主要なものは、その名のとおり、育英事業である。そして、設立の理由からして、その対象は、明治維新に際し、静岡に移住した静岡在住の幕臣の子弟である。会員も多くが静岡移住の幕臣であった者、あるいはその関係者であった。幕臣のつながりは強いようで、明治23年には、会員数513名（うち東京在住者は300名、一方静岡在住者は60名）だったという。

また、静岡育英会自身もその事業として、学餐を経営することもした。明治24年には、普通科と農商科をもうけた。明治26年には農業科が独立し、東京農学校となった。これは、現在の東京農業大学の前身となっているものである。

会長は、当初赤松則良であったが、その後榎本武揚が明治41年に亡くなるまでつとめた。それから、また赤松則良となった。

静岡育英会は、設立後時間が経過し、幕臣だったものも徐々に減少、意識が薄れて、組織が衰退してきた。貸費学生も大正６年初頭では５名程度となって、活動も衰微していた。

そこで、再興をはかるべく、組織を拡大し、事業の拡張をしようとして、大正６年10月、規則を改正した。これには徳川家の宗主、家達が担ぎだされた。家達は、明治36年12月から貴族院議長でもある（昭和８年６月まで）。

この改正で、それまで育英資金貸与の対象者が旧幕臣の子弟とされていたものを、その枠を取払い、「徳川氏の旧藩たる静岡県人の子弟及旧幕府に縁故ある者の子弟」とするようになった。一方では、組織拡充のため、会員も幕臣やその関係者ということだけでなく、一般の篤志家にまで広げられた。地元静岡県でも会員への勧誘が積極的になされた。これにより、会員は、大正10年９月16日現在で937人となった。大正15年11月では1296人となった。

このように、家達を担ぎだしたことは徳川家からの事業資金が予定されたであろうが、会員も広く勧誘された。大正10年からは静岡県から補助金が給付されるようになった。その前年の大正９年には、静岡支部がおかれ、支部長には県知事が就いた。

大正６年10月の改正では、会長の上に総裁を置くこととされ、名誉会員や顧問なども置かれるようになった。総裁には、家達が就任した。家達は、名誉職ということでなく、積極的に活動に携った。

一方、法令上の根拠も、それまで任意の団体であったものが、大正11年８月23日の認可をへて、財団法人となった。

事業の面でも、主たる事業である育英事業では、奨学金の貸与者も相当数にのぼるようになった。大正11年には、事業活動を強固にするため、100万円の基金を募集することが計画された。これは、静岡県内で半分の50万円、東京で50万円の募金を得ようという目論見であった。この計画は、関東大震災で途中頓挫したが、大正15年には再度その実行にとりかかった。米山は、大正15年以降の新規募集では、2000円の寄付である（大正11年のときのものは不明）。ちなみに、家達で６万円である。

大正９年10月には、千駄ヶ谷の徳川邸内の敷地600坪を借り、学生のための２階建寄宿舎、明徳寮（総建坪数280余坪）も建設された。建設費として、７万3000円が募金された。米山は、これに1500円の寄付に応じている。

そして、静岡県での連携を強くするため、静岡県内で、普及のための講演活動が行われるようになった。先の下田での講演もその事業の一つで、新聞記事にもあるように、その時で４回目となるわけである。

ちなみに、陸軍大将まで登りつめた井口省吾は、沼津の在、大岡村の旧家の生れであって、旧幕臣あるいはその子弟ではないが、明治25年ころから会員であったと思われる（明25.11.24の日記）。明治29年11月から評議員であった。明治31年５月29日の役員会では、当時の赤松会長に育英会拡張の意見を陳べている。井口省吾が会員となったのは、井口省吾が沼津兵学校附属小学校出身であることから、多少とも、関係があったことからであろう。奨学金の支給対象者と違って、会員資格の方は、それほど厳しいことはなかったようである。しかし、日露戦争などの関係か、途切れていたが、その日記の大正６年11月28日の条に「山口勝……来訪、山口には静岡育英會へ入會を約す。會長平山正信、静岡県及旧幕出身者育英の條件の下に」、大正７年１月12日の条に「静岡育英會……に特別會員として入會々費毎月金壱円提出の件を通報せり」、また大正８年８月13日の条に「静岡育英會總裁徳川公爵より書面を以て予に顧問を嘱托せらる」、そして「八ノ一七　總裁徳川公に顧問承諾の返事を出す」という記載がある。これらは、事業拡張、組織変更後のことである。

【米山梅吉の静岡育英会へのかかわり】

米山は、先の大正10年９月16日現在の『静岡育英會名簿』には、会員として記載されているし、評議員にもなっている。しかし、その前いつから会員となったかは定かではない。おそらく、育英会が事業の拡張をはかるため、その組織を拡大した大正６年10月以降のことであろう。

前に述べた井口省吾の例に見るように、会員については、それほど厳格ということでなく、なにがしかの関係があれば、許されていたようである。この点についていえば、米山は、高取藩士の家の生まれで、幕臣ではない。しかし、沼津兵学校の流れをくむ沼津中学に在籍したこともあり、静岡県長泉村出身の名士である。このことからいうと、その前から会員であった可能性も否定はできない。しかし、米山には大正の初めころまで、専ら三井銀行の経営という気持ちが強かったといってよいであろう。

米山は、大正３年８月には、「新隠居論」を発表するなど生来的に社会奉仕への志向を有していた。大正５年には青山学院の拡張募金委員長となったり、大正６年10月には、幕臣であった目賀田種太郎を委員長とする米国に派遣された政府のミッションの委員となるなど、対外的な活動にも関与するようになっていた。そして、教育事業への篤志も顕著となっていて、その面でも広く知られるにいたっていた。そのようなこともあって、米山に対し、会員への勧誘がなされたことではなかろうか。

ちなみに、米山の出身地である長泉村、長泉村小学校への寄付はよく知られている。改めて、米山の長泉村への篤志を掲げれば下表のとおりである。

米山は、大正10年９月16日時点で、会員であり、評議員である。そして、静岡育英会が大正11年８月23日財団法人として認可されたことにともない、９月３日理事12名の嘱託があり、米山もその１人であった。そして、理事として、先の講演会の記事にも見られるように、講師を務めるなどの活動にも参加している。その後も理事を続け、昭和２年12月でもそうであった。昭和５年９月30日に任期満了となるところ再任された。しかし、昭和11年11月の名簿では、監事であるという。米山は、昭和９年３月から三井報恩会の理事長となった。この方に専念するため、理事を代ったのであろうか。

【下田講演の概況】

先のように、静岡育英会の事業の一つに奨学奨励のための講演がある。そして、下田講演のときが第４回である。その前年沼津でのものは、第３回である。その前の１、２回がいつどこで開かれたかはっきりしないが、第３回、第４回とも、家達が先頭に立っている。徳川家の静岡県での人気は大変なものである。それよりも家達は、明治36年12月から貴族院議長である。現職の貴族院議長が辺鄙な下田の町へお出ましである。現地では大変な気の使いようである。講演をするについて、聴衆がまばらでは様にならない。その前後の歓迎行事もしかりである。講演会では、開会の辞を貴族院書記官長、今でいえば参議院の事務総長が行うというのである。米山は、当時、三井銀行の常務を辞して、三井信託の社長である。このような状況下では、田舎のこととて名前も埋もれてしまう。

年月日	金額	寄付物名	寄付受所	備考
大08.05.15	350円	器械体操用具	長泉小学校へ	篤志を以て
大10.02.01	2,000円	小学校基本財産	長泉村へ	長男逝去の際
大12.05.01	3,000円	小学校基本財産	長泉村へ	御父長逝の際
大14.06.11	1,000円	小学校基本財産	長泉村へ	次男逝去の際
昭03.04.30	100円	基本財産として	長泉処女会へ	御老母長逝の際
仝	100円	基本財産として	長泉仏教会へ	仝
昭03.06.30		金庫壱個	長泉小学校へ	篤志を以て
昭06.02.15	1,500円	理科器械一式	長泉小学校へ	長泉小学校火事見舞として
昭06.11.10	2,612円	15坪鉄筋コンクリート文庫費	長泉村へ	篤志を以て
仝		文庫納入の図書	長泉村へ	篤志を以て

このときの一行の日程を見てみる。大正13年４月８日の新聞記事によれば、４月６日「沼津驛午後零時二十六分發列車にて到着」という。わかりにくい表現である。これは、午後零時26分に沼津駅を発

車する列車があるが、一行は、その列車で沼津駅に着いたというのであろう。すなわち、当時の時刻表によれば、東京を８時30分に発車する急行がある。これは、12時20分に沼津駅に着く。したがって、「沼津駅午後零時20分着の列車にて到着」とすればよいものを、記者の手元に到着時間のある時間表がなかったからであろう、このような表現となった。

一行は、待受けの自動車で天城を越え、午後４時、下田町に着いた。３時間半である。

新聞記事では、「午後四時」に着いて「午後一時から」講演会を開いたとあるが、これは明らかに間違いであろう。そして、「盛會裡に同五時閉會」その後別の所で４百余名出席の歓迎会があり、「午後七時散會した」とある。記事にある３人の講演を午後１時でなく仮に午後４時から開いたとして、１時間でできるかという疑問が浮ぶ。また、６日には無理だが、その後の日程の中で、午後１時からの可能な日があるか。あるいは、その他の時間帯ではどうか。

同じ新聞の４月９日の記事によれば、次のような行程である。

一行は７日連日の雨にもかかわらず、予定どおり旅館平野屋前より５台の自動車に分乗し、日米条約のなった了泉寺、ペルリ提督の本営であった玉泉寺、吉田松陰の古蹟等を視察し、海善寺を見物し、更に下田高等女学校に立寄り育英会の趣旨を述べ、同10時５分南伊豆の賀茂温泉場に至り、岩崎吉太郎の別荘で昼餐後、午後１時下田町に逆行、松崎街道を北進し、同３時松崎町着、ここから発動汽船で仁科村海岸の堂ヶ島より風光を眺望し、海女の伊勢エビ捕獲を見物、ここで上陸し午後６時出発、下田町の官民合同の懇親会に臨み、蓮台寺の旅館に分宿した。

玉　泉　寺

松陰投宿の地

これでは、午後１時からはもちろん、この日に講演会を開く余裕はない。

次いで、８日は東海岸の白浜村で天草や鮑の採集を見、白浜神社で昼餐、午後１時東海岸線を下河津を経由、天城を越え湯ヶ島の緒明別荘に一泊とある。この日は、午後１時からは無理であるが、午前中なら余裕がないことはない。

一方、『豆陽中・下田北高の百年の歩み』には、徳川公が４月８日に豆陽中（余談であるが、先ごろ亡くなった三国連太郎は、この豆陽中の出身である）にきて、一場の講演をしたとし、速記による話の内容が記載されている。これには、冒頭「私は今日静岡県育英会の講演を開きまする序を以て、此の学校を参観し」とある。これは、今日（４月８日）講演会を開く序でにとも読めるし、講演会を開く序でに今日（４月８日）この学校を参観したとも読める。

いつ講演会があったか判断しがたいが、６日に開いたとする『静岡民友新聞』の記事は、朝来の雨にかかわらず、詰めかけた聴衆は定刻前に満場立錐の余地なく無慮３千人だったなど具体的な描写がある。しかし、「無慮３千人」という数の聴衆が港（湊）座に入りきれるであろうか。このような疑問があるとしても、講演会は、６日、沼津から一行が着いた後、その日に開かれたものとすべきか。当然、開始の時間や終了の時間は、記事のとおりではないことになる。

昭和18年　湊　座
『伊豆下田 市民通信』第10号より

ところで、別の新聞、『静岡新報』４月10日夕刊には、一行が９日「伊豆下田から自動車三臺に分乗して来沼、千松閣ホテルに入り、……同日午後四時四十六分沼津驛發上り列車で歸京」という記事がある。これに対し『静岡民友新聞』の４月11日の記事には、一行は、去る８日夜湯ヶ島緒明別荘に宿泊し、翌９日沼津に至り正午半発列車にて公爵は折柄同列車に東京より来れる夫人令嬢と同乗して京都へ向った、平山男爵はその後、千本浜ホテルにて昼餐、御用邸に伺候、金岡村江原素六翁の墓に墓参、午後４時48分沼津駅発の急行列車で帰京とある。

いずれにしても、米山は、下田町で講演をし、４日間、終始家達と一緒だったといってよいであろう。

【米山の講演内容】

米山が下田で講演をするとすれば、まず頭に浮かぶのは吉田松陰のことである。かえって、これしかないといってもよい。

米山は、明治20年10月19日、横浜からサンフランシスコに渡った。米山20才の時である。苦学の末、明治28年10月28日、日本に帰ってきた。松陰が嘉永７年３月27日夜（ペリー側記録ではその翌日、太陽暦４月25日午前２時）、国禁を侵してでも外国の事情を見聞しなければと、ペリーの軍艦に押しかけ、ひそかに連れて行ってくれることを懇願したのがこの伊豆下田でのことである。このとき、松陰は、25才であった。松陰のときとは、厳しさが異なるとしても、米山は、自分の若き日のことをダブらせて、感慨深いものがあるであろう。

米山の処女作ともいうべきものに、『提督彼理』がある。米山は、米国滞在中、この原稿をほぼまとめ上げた。帰国後の明治29年９月、当時出版大手の大橋新太郎の経営する博文館からこれを上梓した。これは、前編（開国談）と後編（ペリー伝）からなっている。前編の主な参考資料は、「米国政府の蔵書に係る」ペリーの日本遠征の復命書である。これは、『アメリカ艦隊の中国海域及び日本への遠征記』で、『ペリー艦隊日本遠征記』として、翻訳出版されている。この中に、夜陰、下田停泊中の旗艦ポーハタン号に若き二人の若者が小舟で乗付け、米国に連れて行ってくれと懇請してきたが、結局これをことわったことも含まれている。

このことは、米山の著書でも、「下田の逗留、夜半船を訪ふの客あり」の項で触れられている。米山は、大正10年１月４日、長男東一郎を亡くした。その３周忌にあたり、この著書を100部印刷し、近親者に配った。それが命日の大正12年１月４日のことである。あえてこれを印刷したのは、長男が生前この本を見たいというのに、探し出せないうちに死亡したことを悔んでいたからである。これは、今回の下田講演より、ほぼ１年前である。米山は、今回の講演ではこの本のことが記憶に新しく、印象深かったわけである。

米山に『常識関門』という著書がある。青山学院の課外授業「常識講座」で話した内容をまとめたものでる。これは大正７年から始ったが、出版は昭和12年１月である。このなかに「大常識、小常識」という項があり、そこに「吉田松陰とペリー」という一文がある。要旨をいえば、「吉田松陰の人生で画期的なものは、下田における米艦に乗を乞える時にある。松陰の投夷の書に示された、国禁を犯してでも五大洲を周遊せんことを希望したのは、百聞は一見に如かずの常識からでたものであろう」という。いわば、松陰の如き士大夫が国を高めるために、国禁を冒してまで、外国を知ろうとするのは、松陰にとって常識だというのであろう。一方、「ペリーは、この若者の真摯な態度に同情したが、日本との間で日本の国法を犯さないことを約束している、日本の国禁を知りつつ松陰を船に隠すことの不可は、道義を重んじた健全な常識である」というのである。ペリーは、日本との間で通商を開くことが大きな目的である。国法を破る者を連れ帰ることは、幕府との関係で信義に悖ることになるわけである。

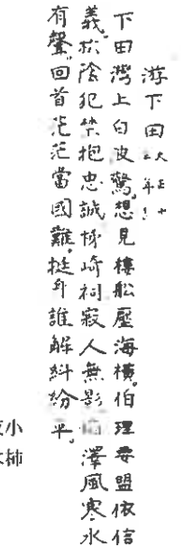
今回の下田講演の時、米山のこの部分の講座が終っていたかどうかわからない。その前後は分らないが、米山にとって、松陰は、興味の対象であった筈である。

ちなみに、米山に次のような漢詩がある。これは、下田講演に行ったときのものである。

游下田　大正十三年

下　田　灣　上　白　波　驚
想　見　樓　船　壓　海　横
伯　理　要　盟　依　信　義
松　陰　犯　禁　抱　忠　誠
柿　崎　祠　寂　人　無　影
稲　澤　風　寒　水　有　聲
回　首　茫　茫　當　國　難
挺　身　誰　解　糾　紛　平

柿崎祠は松陰と金子重輔が隠れていて夜小舟をだしたところ。弁天島にある。柿は柿の異体字。
稲澤は稲生沢川。



赤崎（たかんば）から見た下田
『ペリー艦隊日本遠征紀』より

米山が下田講演で松陰の話しをしたのはよいとして、その内容は、どのようなものであっただろうか。

以上のようなことを考えれば、自分が渡米を志したときの身上をだぶらせて、日本の国、社会のために国禁を冒してまで外国へ渡ろうとした松陰、その後の松下村塾で多くの若者に影響を与えた、その若者が明治国家を動かしているという話をしたと考えるのが普通であろう。

ところが、演題に「當世の」という修飾語がある。このことをどう理解するか。次のように考えるがどうであろうか。

松陰は、徳川幕府に弓を引いた。そして、幕府によって刑死させられた（密航を企てたことからではないが）。いわば両者は、敵対関係に立つ。明治維新になって、松下村塾での松陰の弟子達が新しく国を動かすようになった。家達は、その明治新政府により、明治17年７月、公爵に列せられた。しかも明治国家の基本法である憲法による貴族院議員であり、明治36年12月からその議長である。大正３年３月には組閣の大命まで下った。明治35年には、先の将軍であった徳川慶喜も公爵に列せられるようになった。徳川家は、いわば明治政府の中の一員に組込まれている。

そうではあるが、静岡育英会は、旧幕臣の子弟の奨学を本来の目的として設立されたものである。その組織の最高位である総裁は、家達である。あろうことかその徳川家の宗主、家達が傍らにいる場で、以前幕府の逆賊であった松陰の話をする。

米山は、このような状況を踏まえ、今、松蔭が踏海の企のときから70年、死んで66年、そんな時間が経過している中での松陰の話だということを、米山なりの気の使いようで「當世の」という言葉を付して演題とした。

【沼津での講演の状況】

下田講演の前年、静岡育英会が沼津で同じような講演会を行い、やはり米山が講演をしている。このことについても簡単に触れてみる。

『静岡新報』大正12年６月18日の記事に次のようなものがある。

「徳川公来沼　本日午後歸京」の見出しで、「徳川家達公は十七日午後零時二十六分着列車で来沼、千本濱ホテルに至り国技館の育英講演會に臨み田中慶大教授、米山三井理事、公爵等の講演あり、附近有志六百餘名出席同館に於て歓迎會を開いたが十八日は三島大社參拝後韮中、反射爐江川邸、沼中、沼商

家達一行来韮の記録（江川文庫蔵）

をも視察午後四時廿六分發歸京の筈」

これには、静岡県知事も出席した。静岡県知事は、静岡育英会の静岡支部長でもある。

同じ新聞の翌６月19日の記事に「徳川公歸京　韮山視察後」とし、「静岡育英會事業に付て十七日来沼した徳川家達公夫人令嬢、河井貴族院書記官長以下一行は十八日午前十時半三島町官幣大社に參拝……同十一時一行自動車で出發途中同町在谷田緒明韮造氏方に立寄り……韮山中學校に到り同校生徒の爲めに約十分講演後江川邸にて中餐の上坦庵公の遺蹟を視察し一時半出發蛭ヶ小島反射爐を入訪内浦村三津に出で海岸線を沼津町に出で午後四時廿六分沼津驛發列車で歸京した」とある。

また、この18日、沼津兵学校跡にあった城岡神社に詣でている。この神社は、兵学校のあった一時期、東照宮といわれていたところである。このときの写真が前々号の表紙のものである。

この沼津講演のとき米山がどのような内容の講演をしたかわからない。根拠もなく推し量れば、沼津兵学校、その流れをくみ自身が在籍した沼津中学校のことであろうか。米山は、昭和９年４月、『幕末西洋文化と沼津兵学校』という著作を出版した。これには、沼津中学校のことも含まれている。この出版は、大正12年より後のものであるが、米山にとっては、沼津兵学校、沼津中学校は思い出深いもので、沼津で講演となれば、まずこのことが浮ぶであろう。

【米山の家達との接点】

米山の家達との接点、とくに静岡育英会やロータリーなどに関して、次のようなものが見られる。ちなみに、家達は、文久３年（1863）７月の生れで、米山とは５才年上であり、米山の生れた年に徳川宗家を相続している。

① 大正６年10月、家達は、静岡育英会総裁となり、米山は、遅くとも大正10年９月16日にはその会員、評議員となった。

② 大正10年10月15日、家達は、ワシントンの軍縮会議に全権委員の１人として、横浜からアメリカへ渡った。米山は、團琢磨を団長とする英米訪問団の団員として、同じ船でアメリカに行った。この訪問団は[9]、建前はともかく、軍縮会議の応援団のような意味合いもあった。船の中やアメリカで幾多の接点があった筈である。

③ 大正11年９月３日、米山は、財団法人となった静岡育英会の理事となった。家達は、同会総裁である。

④ 大正12年６月17日、米山は、沼津での静岡育英会の講演で家達に同行、大正13年４月６日、下田での静岡育英会講演も同様。

⑤ 昭和５年６月、米山は、シカゴでの国際ロータリー創立25周年記念の国際大会に、日本からのスピーカーとして家達を東京クラブ名誉会員として送込む。

これには、この大会の委員の１人から、日本の著名人の演説が得られないかという打診があり、米山は、家達しかないといって、家達にかけあった。曲折を経て、結局家達の演説が実現することとなった[10]。

家達が昭和５年12月13日、外交に関しての公務、シカゴでの演説その他欧米巡歴を終り帰国した。育英会有志での帰国歓迎会が昭和６年１月16日催され、米山も理事として参加した。

⑥ 昭和10年２月９日、ポールハリス来日の際、家達は、東京クラブ名誉会員として、米山が中心となったその歓迎行事に参加した[11]。

このような経過を見てみると、米山が家達と忌憚のない付合いとなったのは、静岡育英会が契機のように感じられる。

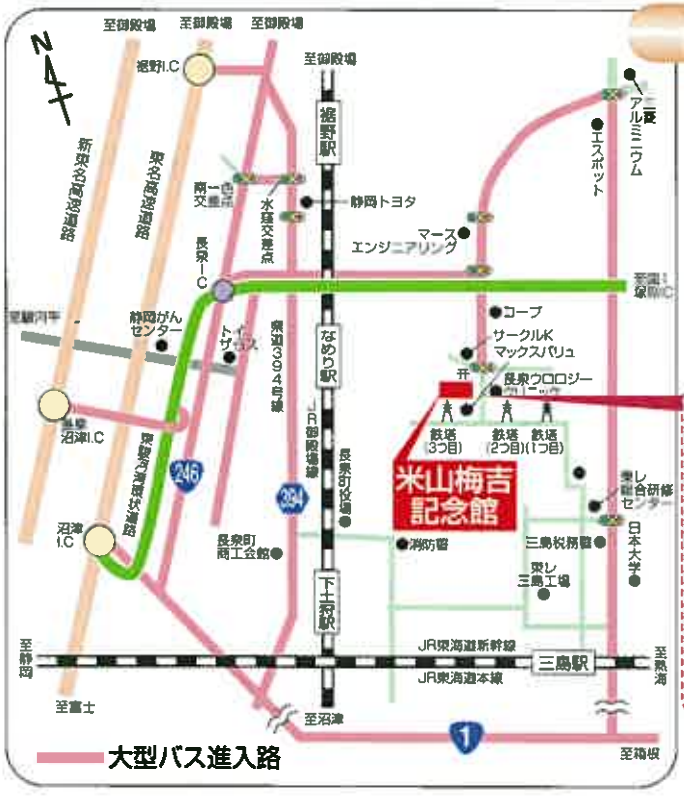
あまり知られていないことだが、米山の静岡育英会への関与は、米山の社会奉仕について、結構重要なことのように思われる。

1 ）静岡育英会のことについては、次の資料による。
① 樋口雄彦「旧幕臣・静岡県出身者の同郷・親睦団体」（『沼津市博物館紀要　24』（平12.03.31）
② 樋口雄彦『第十六代徳川家達』（祥伝社　2012.10.10）
③ 沼津市明治史料館所蔵
ア 「静岡育英會略記」
イ 大正６年10月改正の「静岡育英會規則」
ウ 大正７年３月付　静岡育英會會長の勧誘文書
エ 「財団法人静岡育英會會報　第四号（昭和４年１月発行）」
オ「財団法人静岡育英會會報　第七号（昭和６年１月発行）」
カ「財団法人静岡育英會會要覧（昭和13年10月）」
キ「財団法人静岡育英會會況報告書（昭和14年10月発行）」
④ 『渋沢栄一伝記資料　第46巻』
ア 「財団法人静岡育英会要覧（大正十五年十一月調）」
イ 「財団法人静岡育英会第壱回報告」
ウ「財団法人静岡育英会会報　第二号（昭和２年12月発行）」
エ「財団法人静岡育英会基金募集趣意書」
⑤ 『静岡育英會名簿（大正拾年九月十六日現在調）』
2）幕末期、榎本武揚らとオランダに留学し砲術、造船学などを学び、維新後明治政府に出仕し、海軍中将、貴族院議員など歴任した。
3）このときで、名誉会員３名、有功会員18名、終身会員237名、特別会員302名、通常会員636名、賛助会員100名であった（上記１）④ア）。なお、会員数は、昭和14年10月現在で1694名となっている（上記１）③キ）。
4）上記１）③エ
5）『長泉村之各種郷土の研究』　これは、昭和６年ころ長泉尋常小学校の教員らによって編集発行されたであろうとされる。
6）上記１）④イ
7）上記１）③オ
8）オフィス宮崎編訳『ペリー艦隊日本遠征記　上・下』（万来社　2009.4）
9）英米訪問団のことについては、米山梅吉記念館35周年記念誌本文29頁をご覧いただきたい。なお、資料としては『團琢磨傳　上』（昭和13年１月）、『英米訪問實業團誌』（大正15年４月）が詳しい。
10）このことについては、同記念誌本文40頁、資料編「米山梅吉のガバナー通信（一）ないし（四）、（九）」をご覧いただきたい。
11）このことについては、同記念誌本文49頁をご覧いただきたい。

米山梅吉記念館春季例祭

お知らせ

日　時　平成26年4月26日（土）　午後２時～
場　所　米山梅吉記念館ホール
　新幹線三島駅よりタクシー５分　東名沼津ICより15分
内　容　例　祭
　講　演　〔講師〕水野正人 氏
　　東京オリンピック招致委員会CEO
　　日本オリンピック委員会　名誉委員
　　第2580地区 2011～12年度ガバナー（東京RC）
　　〔演題〕「東京五輪の国際交流に果す役割」
　アトラクション
　　ザ・ウェストサイズ（三島西RCバンド）
　　クラシック・軽音楽
　懇親会　講演者、参加者ご一緒に懇親　登録料無料
　多くの皆様のご来館をお待ち申し上げております。



米山梅吉記念館のご案内

● 開館時間 ●

午前10時～午後４時

● 休 館 日 ●

- 月曜日
- 12月28日～１月４日
- 整理のための休館日（５月・８月の特定日）

米山記念館及び館報へのご意見、ご感想、寄稿等お寄せ下さい。

米山梅吉記念館 館報

Vol. 23

発行日　平成26年３月10日
発行者　公益財団法人 米山梅吉記念館　理事長　渡邊脩助
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1
TEL（055）986-2946 FAX（055）989-5101
URL : http://yoneyama-umekichi.jp/
e-mail : yumh@ai.tnc.ne.jp
印　刷　フタバ印刷株式会社